

高校古典教育の探究

伊東武雄氏は篤実の人である。その人柄がこの著のすみずみにあふれている。

第一章は「素材読みとその深化の方法」で、藤原与一博士の三段階法をふまえ、「徒然草」四五段「榎木僧正」、同三二段「長月二十日のころ」、紫式部日記「寛弘五年の二節」、「枕草子」一四三段などについて、授業の展開を克明に記述したうえで、生徒の反応を整理している。さらには、その発展として、他の古文・漢文から現代小説・現代詩の一部にも論を及ぼしている。氏の記述を読むと、文章の構成や事件の展開に即して、いかなることが学習の焦点になり、それがどのような生徒の反応を喚び起したかが、よくわかる。実践の強みである。

第二章は「徒然草学習指導の実際」として、創作法の試みが示されている。例を挙げると「仁和寺にある法師」(五二段)の失敗談について、「かたへの人」の応答の創作が、生徒作の実例によって示されている。これを説むと、法師のしくじりに対する、「かたへの人」の皮肉や辛らつな批判が出ていて、法師の行爲の浅はかさについての生徒の読み取りの実態がうかがわれる。

第三章「更級日記学習指導の実際」では、「心情語」に着目してのとり扱いがこまかにのべられている。伊東氏の指導の構想は、「一、留意点」「二、指導事項」「三、作品分析(場所・時・人物・事件・主題)」「四、授業過程」「五、生徒の記録(授業記録)」という形に組み立てられている。その中に、生徒による「授業の記録」がのっているのが興味を惹く。この「記録」には、教科名・作者名・時間・授業日・校時・記録者を記した上で、「板書」(授業順序(内容))、「授業について(印象とその理由)」「印象に残ったこと、考えさせられたこと」「わからなかったこと、問題に思ったこと、聞きたいこと」「授業態度とその反省」(授業についての助言・注文)が記載されている。授業記録当番は、非常に緊張した時間を経験するだろうが、同時にきわめて充実した学習成果を得るだろう。伊東氏は、一つ一つの教材の授業についての、生徒の反省・要望を確認することによって、みずからの教材観をふとらせ、次の授業態勢に役立てようと努めていられるのである。

第四章は、「蜻蛉日記指導の実際」で、まづ堀辰雄の「かげろふの日記・曠野」の話しいから始めて、くわしい指導過程がのべてある。時間の推移や事件をたどりながら、特に心情の連続的認知・考察に力をこめている。最後に「受容の実態」として、学習後の生徒のかなり長文の感想文をかかげているのは、伊東氏のゆきとどいた指導ぶりを示す。

第五章「源氏物語指導の実際」は、授業の概略と、生徒の受容・反応の網羅的整理である。

第六章「古典学習指導の試み」には、堀辰雄の「曠野」とその原語である今昔物語卷三〇「中務大輔娘成近江郡司婢語」との比較読みという、思いきった授業展開が、くわしく示されている。両作品の叙述・展開の対照表に加えて、生徒たちの受容の実態を示しているのは、伊東氏の基本方針である。また、「反

省と課題」を記しているところにも、伊東氏の

古典教育に対するなみなみならぬ覚悟が示されている。生徒の受容の実態をこまかに紹介できないのは残念であるが、生徒のひとりひとり、古典や古典に原拠を持つ小説を、けっして縁遠いものにとらえずに、非常に身近なものとして、あたかも眼前の人物・事件であるかのように、ヴィヴィッドに思い描き、自分自分の思いを感想文や学習整理文に書きこんでいる。古典教育の成果の一つである。

第七章「文法指導の実際」は、特に伝聞・指定(断定)の「なり」の指導法の克明な記述である。多くの用例を利用し(実際にプリントして生徒に渡し)、また対照的一覧表を作って、生徒の文法事象に対する理解を深めている。この章には、伊東氏が実に多くの文法書に当たり、多くの用例を検討して、そのうえで生徒への文法教育に臨んでいることが、ありありと示されている。ゆきとどいた教材研究と言うほかはない。このような深い考察を背景にした教師の授業を受けられる生徒は幸せである。

第八章は「古典語い指導についての試案」

で、「作品を正しく理解し、深く味わう」「古語の知識・関心をたかめる」「ことばを見つめ、ことばを考える態度を養う」という指導の基本方針と、具体的な指導方法がくわしくのべられている。中でも、具体的方法として、実物法・視写法・対比法・宛字法・分析法・語源法・文脈類推法・反復法・朗読法その他が挙げられ、具体事例を豊富に盛りこんだ記述になっている点が注目される。語い指導の体系化は、非常に大切な課題でありながら、同時に大へんむずかしい面を含んでいるが、伊東氏の提言は、このことへの積極的なアピールを含んでいる。

第九章「国語学習指導の問題点」はこの書のしめくりとして、生徒の実態をふまえたうえで、古典教育のあり方を考察している。

恩師である野地潤家博士の「まえがき」にも引用されているように、「国語教室には常に新鮮な感動と刺激と変化がある」という伊東氏の信念が、この本を一貫して、さまざまな教材に、授業に、論述に生きていることに、心から敬意を表するものである。

(A5版、二八二ページ、昭和五十八年三

月一日、溪水社刊、三、五〇〇円)

(浮橋 康彦)